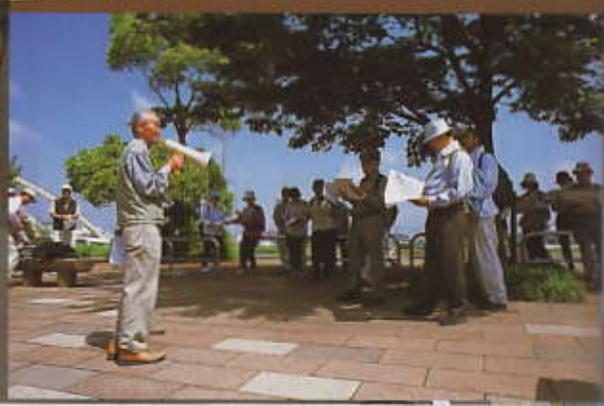
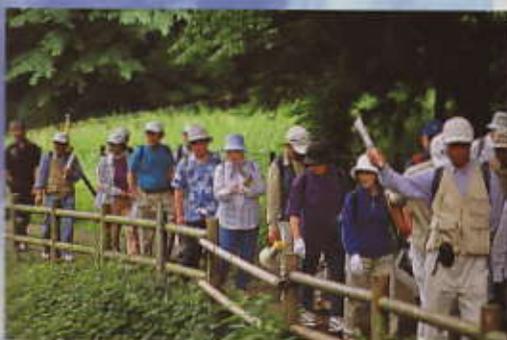


まちづくり①

# 熟年パワーで 地域の魅力づくりをすすめる

神奈川・横浜市  
鴨居駅周辺まちづくり研究会・魅力づくり隊





ウィークデーの朝九時過ぎ、ここJR横浜線の鴨居駅改札口。電車が到着するたびに、近くにある大手の家電メーカーなどに勤めるのであろうスーツ姿のサラリーマンが、急ぎ足で通り過ぎていくなか、リックサックを背負い、のんびりとあいさつを交わしている熟年の一団がある。

この熟年の人たちは、鴨居地区に住む熟年者が中心になって組織した「鴨居駅周辺まちづくり研究会・魅力づくり隊（通称「鴨居まち研」）」が開催している「鴨居まち研ウォーク」の参加者たち。この日、まち研の呼びかけに応じて集まった三十名ほどの熟年の人たちとまち研のメンバーのうち十名ほどが参加。区内の寺をはじめ名所などを、まち研のメンバーが案内役を務め、約八キロメートルの行程を五時間かけて探索するというもの。まち研では、このような催しを年数回開催している。

まち研の始まりは、平成九年六月に緑区が、地域住民に、鴨居地区のまちづくりを考えてもらうと公募によって組織された研究会に始まる。参加した住民たちは、「交通問題対策班」と「まちの魅力探し班」に分かれ活動を続ける。「まちの魅力探し班」は、街の魅力の調査を行い、住民にふるさとを感じてもらうためには「魅力マップ」づくりが必要と区に提言して一旦は解散するが、自主的なグループとして平成十一年から、まちの魅力探し班のメンバーを中心に七名で発足した。



かも研が最初に取り組んだのは、引き続き「街の魅力を探そう」。新住民が多いなか、自分の街のことは意外と知らない。わざわざ遠くに出かけなくても、周辺に素晴らしいところがあるのではないかと、会員たちが歩き、街の魅力調査をしてみた。また、古老をはじめ住民からの情報を得て、完成したのが「鴨居駅周辺の魅力マップ」。四十以上の公園、石碑、寺社、遺跡などを写真と文書で紹介している。この冊子は、区の助成を仰いで三千部を印刷。区役所、地区センターなどにおかれ、無料で配布されたが、一か月で品切れとなる。さらに区費で三千部を増刷、これもすぐそこをつき、会員がスポンサーを探し出し、さらに三千部を増刷している。そしてこれも残部僅少だという。

その後、まち研の活動は、毎年五月五日、鶴見川の河川敷で開催される「こども風のまつり」に参加して、子どもたちに、万華鏡づくりや風づくりなどを教えたり、老人施設への訪問、歴史講座の開催、お年寄りが一休みできるベンチの設置、不法投棄場所の調査や清掃活動などにひろがっていく。また、魅力探しの実績をかわれて区役所などが作成する「街歩きのガイドブック」などの編集にも協力している。

大手電機メーカーに勤めていた代表の狩野陽二（69）さんは、「会社のOB会にも参加しているけれど、OB会は過去形の話が中心、私たちの活動は未来形の話。未来を語る方が断然楽しい」と、



活動の魅力を語っている。

今、会社を退職し、第一線を引いた人たちが、いかに地域のなかで過ごしていくか、地域活動に参加していくかが大きなテーマとなっている。とはいっても、「会社人間だった私が、定年後、突然地域に出るといわれても、どうして良いかわからなかった」と狩野さんが述懐するように、これまで地縁のなかった人たちが地域に溶け込むのは簡単なことではない。

そんなことから、まち研では、仲間づくりには熱心だ。チラシで募集案内をするとともに、毎月一回開催される定例会でも、「安西さんは「入会はしないけれど、お手伝いはする」と言っているよ」など日頃からの報告がなされるように、会員が普段から新しいメンバーの発掘に気を配っている。事実、メンバー数は、発足当初の七名から現在四十名を超えるまでになった。四十代のメンバーも数名いるが、大半は六十歳以上の人たち。活動を担うのは熟年パワーである。

まち研では、今後、「鴨居駅で駅コンを開きたい」、「教師が地域の人たちと接触したら良いか悩んでいるようだが、まち研としても考えていこう」と言うように今後も、より深くまちづくりにのめり込むことになるのだろう。

■連絡先 横浜市緑区鴨居四一三一六―二三二

狩野 陽二

TEL 〇四五―九三二―四三三九